

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191300991		
法人名	株式会社You More Smile		
事業所名	グループホーム ほのぼの		
所在地	岐阜県加茂郡東白川村越原16-1-1		
自己評価作成日	令和4年1月1日	評価結果市町村受理日	令和4年3月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kajokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2191300991-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kajokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2191300991-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	令和4年3月3日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・家庭的な環境で、常に目配り・気配りを心掛け、利用者個々のニーズに合ったケアの向上に努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

小さな村に立つ唯一のグループホームである。利用者や職員も地域の出身者がほとんどで、顔見知りの関係もある。そのような環境の中、これまでは地域に出て知人・友人と会ったり、馴染みの場所に出かけたりしていたが、今は新型コロナウイルスの脅威に晒され、地域交流や外出支援は大きな制約を受けることとなっている。  
地域イベントのほとんどが中止となり、文化祭には利用者の作品を出展したものの、感染防止の観点から見学を自粛した。ボランティアのホーム来訪も中断したままである。  
そのような中にも楽しみはある。感染防止対策を講じて買い物に出かけたり、ホーム内で郷土料理(ほう葉寿司、芋餅等)を楽しんだりしている。今日(3月3日)は、ちらし寿司作りに余念がない。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	長年にわたり共に暮らしてきた地域で暮らし続けることの大切さや価値をお互いに理解しており、つながりを大切にしている。	「お互いが助け合ってこれまで通りに暮らしていく」ことや、「家庭的な雰囲気の中で自分らしく生活する」ことを理念に盛り込んでいる。利用者の個性を尊重して支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	村で唯一の認知症のグループホームであり、地域の方々や関係機関にはとても大切にいただいている。	地域の行事が軒並み中止される中ではあるが、文化展が開催され、利用者が作品を出展した。しかし、新型コロナウイルスへの感染防止の観点から、見学は見合わせた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	村で唯一の認知症のグループホームとして地域に知名度があり、老人クラブのボランティアの方々などを通して地域に広がっているが、ここ2年はコロナ禍で制約を受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヵ月毎に会議を開催しているが、ここ2年は書面開催や他施設での開催とし、参加人数も最低限にした。外部評価の結果やホームの近況などを報告し、意見交換や情報共有を行なっている。	コロナの感染状況を見ながら、運営推進会議を対面開催とするか、書面開催とするかを決めている。対面開催の場合は、会場を保健センターに移して実施している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の参加はもちろん、日常的に密な連携をしている。	1年間(6回中)に3回、対面での運営推進会議が開催されたが、村役場(村民課)職員と地域包括支援センター職員は毎回出席している。役場までは車で5分の距離であるが、電話等で用を済ませることが多い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月のミーティング時に必要時ではあるが、「身体拘束適正委員会」の開催や研修を実施・記録している。身体拘束の禁止は現場に浸透しているが、スピーチロックについては研修をして再確認をよくしている。	身体拘束適正委員会は、毎月のミーティングの中で行っている。身体的な拘束事例はないが、スピーチロックはしばしば検討課題に挙がっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の事例や報道資料を通して、職員が虐待の理解と防止の徹底を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今のところ権利擁護制度に該当する事例はないが、今後に備え知識の共有を図っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・改定・解約の際は、利用者や家族に理解・納得していただけるよう丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日頃から気軽に相談や意見を出していただけるような関係作りに努めている。	「蔓延防止の重点措置」が発出されているが、制限付きで家族の面会を認めている。かかりつけ医への受診は家族が対応しており、その際に管理者や職員が家族の意見・要望を聞き取っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回のミーティングに会社役員や管理者・職員が全員出席をし、運営の意見や提案を出している。	1年前に経営母体が変わり、新体制下の役員が毎月のミーティングに出席している。ミーティングでは、ケア・カンファレンスとホーム運営に関する話し合いを行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善や人事評価に関する基準や仕組みを整備し運用している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で積極的に外部の研修に参加することを推奨できないが職員ミーティングの時間を使い研修を行うなど資質向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で以前のように同業者と積極的に交流する機会が確保できない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談の段階から本人の要望などを丁寧に聴き取り信頼関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から家族の要望などを丁寧に聴き取り、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談の段階から本人や家族の現状について詳しく把握し、適切な支援ができるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「一つ屋根の下」で共に過ごす者同士、「親しき仲にも礼儀あり」を常に意識して対応している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員では代わりになれない家族ならではの立場を大切にし、共に本人を支え合う関係づくりをしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍ではあるが家族のみならず近隣や友人、知人の面会も感染防止に注意して行なっている。家族との受診時に自宅に寄る機会もある。	ホームとしては、馴染みの場所の支援は自粛している。家族同伴で医療機関を通院受診する際、自宅や馴染みの場所に立ち寄ってくることもある。パッチワークが趣味であった利用者は、貼り絵に熱中している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	現在利用者は女性のみでほとんどの人が小さな村の出身で住民であるため波長が合うのか利用者同士で関わったり支えあう光景が職員がフォローする以上に日常的にみられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	小さな村であるため、利用終了後の家族に地域で会う機会がよくある。必要に応じて相談や支援を行なっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの日常の会話や様子などから思いや意向を汲み取り、職員間で記録やミーティングで情報共有している。	介護度が低い(平均介護度1.78)割に、自らの意思を表出できる利用者は少ない。職員が誘い水の言葉を出したり、2者選択にしたりして、利用者の意向を把握しようとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	小さな村のため生活歴や生活環境などがわかる情報源が豊富にあり把握しやすい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の様子を記録したり、申し送りをして職員間で現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全職員と訪問看護師が出席する月一回開催のミーティングにおいて、介護計画のモニタリングや目標の見直しを行っている。	定期的(短期3ヶ月、長期3ヶ月)に介護計画を見直し、介護認定の区分変更があったときにも見直しを行っている。訪問看護師もカンファレンスに加わり、健康面の計画作成を手助けしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの介護記録ファイルと共に、業務日誌や職員の申し送りノートを使い、記録と情報伝達、共有を行ってケアの実践と介護計画の見直しに活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	機会は少ないが、既存にとらわれない柔軟性のある対応ができるように心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	同じ地域内にあるホームの中で安全に安心して暮らし続けられるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診対応は原則として家族にお願いしているが、専門的な内容については、職員から直接、或いは訪問看護師を通して主治医に相談をしている。	9名中8名の利用者が村内の国保診療所を、他の1名は隣町の医療機関をかかりつけ医としている。訪問診療、往診の対応がなく、家族対応の通院受診が基本となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携をしている訪問看護ステーションの看護師と、週一回の定期訪問時や、電話で情報共有や相談をし、適切な医療に結びつくように努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院から退院まで医療機関と密に連絡を取り、情報提供やカンファレンスなどの機会を設けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の段階からホームの特性を説明し、重度化や終末期について本人と家族の意向を聞きながら適宜方向性を決めている。	村内には夜間の診療に対応する医療機関がなく、夜間の急変等は救急車による他市町への搬送を強いられる。訪問看護師と連携しての看取り経験はあるが、ここ数年は実施していない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は研修やミーティングを通して実践力を強化している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防訓練を実施している。日頃から福祉施設の被災などの報道に気をつけ、防災についての意識を高めている。	ハザードマップ上で警戒区域に指定されている。かつて「避難勧告」に従って非難する途中、2次災害に巻き込まれる寸前の事態を経験しており、災害時にも状況を判断した上でホームに留まる方針である。	災害BCP(災害時の事業継続計画)と感染症BCP(感染症に対する予防と対応・対策計画)の作成、AEDの設置検討が望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに合わせた対応や言葉遣いを大切にしている。小さな村であるため、職員は個人情報の管理やプライバシーの保護を日常的に意識している。	利用者と職員には地域の出身者が多く、顔見知りの関係もある。理念に謳う「家庭的な支援」が「馴れ合い」とならないよう、毎月のミーティングでも取り上げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が自ら希望や要望を表出することが少ないため、職員が気持ちや思いを察したり自己決定や選択ができる機会を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームでの大まかな一日の流れはあるが、一人ひとりのペースに合わせて暮らしていただけるように配慮している。例えば朝食の時間は一律にしないなど。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	気に入った服を何日も着ていたり、何枚も重ねて着たりされても職員は容認している。提案やさりげなく髪を整えるなどの支援をして、その人らしい姿で過ごしていただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの力に合わせて食材の下ごしらえ、盛り付け、洗い物、時には一緒に調理を行っている。季節の料理や郷土料理、行事の料理も積極的に取り入れ楽しんでいる。昨秋はたくさん干し柿を作りました。	自宅が農家である職員から、新鮮な食材(野菜等)のお裾分けがある。それらの食材を使い、3食手作りの食事を提供している。郷土料理の「ほう葉寿し」や「芋餅」は、利用者にも大人気である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量を毎食記録し、体調の変化や食事の様子を職員間で共有している。必要に応じて訪問看護師や主治医に相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後一人ひとりの力に合わせて口腔ケアを行っている。口腔内のトラブルがあった時は、訪問看護師や訪問歯科に相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンや習慣を把握し、また、毎回の記録をもとに声かけや介助を行なっている。職員は使用ごとにトイレの清掃や消毒を行い排泄の状況を確認している。	トイレでの排泄が基本であるが、車いすの利用者は居室にポータブルトイレを置き、昼夜ともに使用している。排便チェック表を活用し、便秘と思われる利用者には、訪問看護師と相談して便秘薬を使っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	介護記録のほかに排便チェック表を用いて排便の管理をしている。必要に応じて飲食物の工夫や下剤の服用、訪問看護師や主治医に相談をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	隔日の午後に一人ずつペースに合わせて入浴をさせていただいているが、入浴を拒まれても足浴や清拭、着替えのみなどで対応している。	利用者は、1日置き週3回の入浴機会がある。羞恥心から入浴を拒む利用者があり、無理強いせずに足浴や清拭で対応することもある。入浴剤は、ほぼ毎日使っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、居間や居室、縁側、台所など一人ひとりの過ごしたい場所があるため、居心地よくさせていただいている。室内の温度や明るさ、寝具内の温度にも気をつけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの介護記録ファイルに薬の最新情報シートが綴じてあり、職員全員が服薬等の情報を理解できるようになっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や力に合わせてできることや興味のあること、得意なことを取り入れてその人らしさを支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍によって買い物や外食、村の行事への外出は大幅に制限されてしまったが、ホーム近くの職員との散歩や家族との受診外出程度は行なっている。	ホームは自然環境に恵まれ、周辺に人込みもないことから、感染対策を講じた上で散歩やドライブに出かけている。家族同伴でかかりつけ医に通院し、帰り道に寄り道をすることもある。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホーム近くに商業施設がなく、日常ではお金を使う必要がないと思われているが、希望のある方は職員が日用品や衣類、趣味の品物を一緒に買いに行ったり代わりに買ったりしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	特に制限なく行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームが一般住宅の改修施設であるため、家庭的な住環境を大切にし、それぞれの入居者に合わせた居心地の良い空間づくりをしている。	新型コロナウイルスへの感染防止の観点から、今年度は電話による聞き取り調査としたため、この項目のコメントはなし。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	複数でも一人でも居心地よく過ごしていただけるよう居間や台所、縁側、景色のみえる廊下のつきあたりなどの席に配慮をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に本人や家族と持ち物チェック表を用いて相談の上、使い慣れたものや好きなものを持ち込まれていただいている。	新型コロナウイルスへの感染防止の観点から、今年度は電話による聞き取り調査としたため、この項目のコメントはなし。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりが安全に安心して過ごせるように手すりや家具の設置を工夫したり、トイレや洗面所などの場所の表示や表札を掲げている。		